

この状況を受けJICAは、南部スーダン政府の協働組合・農村開発省と協力し、農村開発の中心的な役割を担うコミュニティ開発官や農業普及員の能力強化に着手。南部の首都機能が置かれたジュバ近郊の農村開発、彼らを通じたモデルコミュニティの開発支援を開始した。モデルコミュニティの選定では、帰還民・国内避難民も恩恵を受けられるよう配慮したことから、農民グループの中には帰還民が全体

の90%以上を占めるところも出てきた。しかし、「最初はどの村に行っても、住民から出てくるのは『話し合いはいらない。何をくれるんだ』という言葉ばかり。紛争でモノを奪われ、抵抗して殺された家族や仲間を見てきた彼らを奮起させるのは容易ではありませんでした」とプロジェクトマネージャーを務める、山本幸生・JICA専門家(システム科学コンサルタンツ株式会社)は話す。

農民の自主性を生かした活動を推進

09年からJICAは農村部の生計向上を支援すべく「ジュバ近郊の平和の定着に向けた生計向上支援プロジェクト」をスタート。元来、住民の約9割が農業に従事していたこの地域。しかし、南部スーダンでは内戦中に農業が放棄され、現在、食料は近隣諸国からの輸入と国際機関からの支援に頼っている状況だ。農業に必要な農機具も技術もなく、農民の約6割が1日1食の生活を送っていた。

もちろん、内戦中は農業どころではない。技術も経験もない彼らにとって、最初は失敗も多かった。しかしプロジェクト開始から2年が過ぎた今、各地のモデル農場で、青々とした野菜を目にするようになった。内戦による傷を負った村人たちにも、少しずつ変化が見え始めている。「ある畑の状況を調査している時、その家の人

が休憩中にトウモロコシをこちそうしてくれたんです。『これはJICAの支援で作ったトウモロコシだ。この村のためにありがとう』と。現場の人間にとっても、これ以上の感動はありません」と山本さん。「村人たちが自信を持って成功を外に伝え、他の村のやる気を喚起していく。そういった良い連鎖を生み出していきたい」と強調する。

自分たちの力で村は変わる。南部スーダンでは、村人たちが自身の手により、確実に復興への道が切り開かれている。

国際社会の仲裁により包括和平協定(CPA)が結ばれ、長年の戦いに終止符が打たれたのは05年、わずか6年前のこと。国内外に逃れていた難民・国内避難民も、故郷に戻り始めた。JICAはCPAを受けて、内戦激化により93年から停止していた協力を再開。06年には首都ハルツーム、その後南部スーダンのジュバにオフィスを構え、国際社会の中にもいち早く現場に入った。

「ジュバ市内は道も舗装されていなければ、大きな建物もない。最初は、事務所も住居もテントでした」とJICAスーダン駐在員事務所の穴戸健一所長は話す。当時は度重なる交戦と攻撃の舞台となり、南部スーダンの基礎インフラや公共サービスがなかった。新しい政府がなかなか機能しない中で、活動は容易ではなかったが、JICAは「紛争被災民・社会再統合支援」と「基礎生活上支援」を2本柱として位置付け、職業訓練、保健、理科教育、給水、道路整備、河川港建設など

南北の紛争が残した負の遺産

農民と一緒に収穫量を調査する原田淳之輔JICA専門家



懸命に農作業に取り組む農民たち。彼らがほかの農民に技術移転を行っていくことが期待されている

「ジュバ市内は道も舗装されていなければ、大きな建物もない。最初は、事務所も住居もテントでした」とJICAスーダン駐在員事務所の穴戸健一所長は話す。当時は度重なる交戦と攻撃の舞台となり、南部スーダンの基礎インフラや公共サービスがなかった。新しい政府がなかなか機能しない中で、活動は容易ではなかったが、JICAは「紛争被災民・社会再統合支援」と「基礎生活上支援」を2本柱として位置付け、職業訓練、保健、理科教育、給水、道路整備、河川港建設など

の90%以上を占めるところも出てきた。しかし、「最初はどの村に行っても、住民から出てくるのは『話し合いはいらない。何をくれるんだ』という言葉ばかり。紛争でモノを奪われ、抵抗して殺された家族や仲間を見てきた彼らを奮起させるのは容易ではありませんでした」とプロジェクトマネージャーを務める、山本幸生・JICA専門家(システム科学コンサルタンツ株式会社)は話す。

from Kenya



ダダブ地区の難民キャンプには、住みかや食料、医療などを求めて大勢のソマリア難民が押し寄せる ©UNHCR/E.Hockstein

難民と地元住民の共存を

情勢不安により、世界有数の難民発生国であるソマリア。その数は、67万8,300人(2009年UNHCR発表)にも及ぶ。同国国境まで約90キロ、1991年にUNHCRが3つの難民キャンプを設置したケニア東部のダダブ地区には、現在、約30万人のソマリア難民が暮らしている。難民は年々増える一方。その数はすでに収容可能な人数の3倍以上に及んでおり、コレラなどの感染症の拡大、生活インフラの不足など、地区内の生活・衛生環境は悪化している。さらに、難民を受け入れる地元住民やホストコミュニティとの間でも、水や薪炭材などの取り合いが頻繁に発生しており、同地区の遊牧民の生活基盤である天然資源が枯渇しつつある状況だ。これを受けJICAは、ホストコミュニティの負担軽減に向けた支援を見据えて調査を実施。その結果を踏まえ、特に住民からのニーズが高かった給水分野の支援を行うことを決定した。今年5月から、ケニア水灌漑省などと協働で水脈の調査を行い、井戸の設置、給水施設の建設、水利組合への研修などを行っていく予定。コミュニティ全体の生活改善を図ることによって、地元住民と難民の間のあつれきを未然に防ぎ、共存を推進することで、地域全体が安定するという波及効果も期待される。



スーダン from SUDAN

農業を通じて新しい国づくりを

20年以上にわたる内戦を経て、平和の定着に向けて歩み出した南部スーダン。JICAは近隣諸国から帰還した難民・国内避難民を含むすべての人々に平和の恩恵が行き渡るよう、復興支援の一環として農村開発に取り組んでいる。

青空の下、キャベツやオクラ、落花生などたくさんの野菜が実った。農民たちの努力のたまものだ